

『ガス人間日記』

◇ 登場人物

・ 僕

・ 先生／いじめっこ1

・ 富士の千代／いじめっこ2／死体

「僕」が、先生によってガス人間にされ、犯罪の道具になっていく様を描く。その経緯が、僕の日記によって語られていく。

僕は基本的に日記帳を見ながら喋っている。

僕 七月十五日。今日から日記を書くことになった。なぜ書くのかはわからないが、先生の言うことには逆らえない。きつとこれが、僕の運命なのだろう……日記を書くのは、たぶん、小学校以来だ。思い出せばその頃は、体が小さく、よくいじめられていた。

いじめっこ1と2、踊りながら出てくる。

いじめっこ1（僕を指し）あー！

僕、咄嗟に身を隠す。

僕 なぜかいじめっこ達は、僕のことを「デフレ」と呼んでいた。

いじめっこ1 おい、あんなところにデフレがいるぞー！

いじめっこ2 ほんとだー！ デフレみつけ！

いじめっこ1 デフレがこんなところにいるんじゃないよ！

いじめっこ2 そうだそうだ！ デフレはどっかいっちまえ！

いじめっこ達、「デフレ反対！」などと合唱しながら、並んで去っていく。

僕

世の中の景気が良くなるにつれて、いつのまにか「デフレ」と呼ばれることもなくなっていく。もちろん、いじめがなくなるとホッとしたけど、実を言うと、なんだか役割を奪われたようで、寂しい気持ちもあった。そう考えると、僕は昔から、何者でもない自分、という存在になるのを恐れていたのかもしれない……これから、僕はどうなってしまうのだろう。不安で、怖くて、吐きそう。でも僕には、どうすることもできない。いや、正直、どうしようとも思っていないのかもしれない……今日は疲れた。もう眠ることにする。……七月十六日。今日から本格的に訓練が始まった。先生が、直々に指導してくれた。先生は、昨日とは全くの別人のようだった。

先生が出てきて、小学生が作文を読むようにして話し始める。

先生

きりーつ。これから、ガス人間の訓練を、はじめます。きりーつけー、れー。

二人、お辞儀をする。

先生 今日は一、犯罪とは何かについて、お話しします。

僕 先生いわく、犯罪とは、「なんかー、おやかー、せんせーとかー、おとなにー、おこられることー、をー、することです」だそう。だとして、僕は、犯罪とは程遠い人生を送ってきたと思う。ずっと生真面目で、誰にも迷惑をかけないように生きてきた。

先生（僕を指し）おまえー、今日から犯罪者な。

僕 だから、先生からそう言われた時、ものすごく不安になった。僕にできるだろうか。僕は、犯罪者にふさわしい人間なのだろうか。まだ被害者の方が気が楽だ。

先生、お辞儀して出て行く。

僕 七月十七日。先生に、僕は犯罪者に向いているのかどうかを尋ねてみた。先生は、人間は誰だって加害者にも被害者にもなる、というようなことを言った。その口調は、昨日の小学生風とはまた違って、ラッパーのようだった。

先生、イエ、オオ！ などとラッパーっぽいノリで登場し、

先生 おまえは！ お！ あ！ はんざい、しゃ！ お！ かつ、ひがい、しゃ！ おまえは！ というか！ みんな！ そうだ！ おなか！ すいた！

先生、イエ、オオ！ などと言いながら退場する。

僕 七月十八日。今日、初めて気づいたことがある。先生の人格のことだ。会うたびに別人のようになっていた先生だったが、あれは多重人格というのではなく、先生がハマっているものなのだという。だとして、昨日のラッパーはまだわからなくはないが、その前の小学生はなんだっただろう？ 小学生にハマるとは一体……ちなみに今日は寿司屋さんだった。質問をするたびに……

先生の声（舞台袖から）はいよろこんでー！
僕 と応えていた……七月十九日。今日の先生は、秘密にハマっていた。なんでも二人だけの秘密にしようとした。

先生、急に走ってきて、

先生 おい！ 絶対誰にも言うなよ！ 俺な……ホモなんだ……。
僕 それは、僕にも秘密にしておいて欲しかった……それから先生は、僕が書くこの日記も、誰にも見せてはいけない、と言った。

先生 見せるなよ！ わかった？ 見せるなよ？ おい、聞いてるか、見せるんじゃねえぞ！ おい、見せるなよ！

僕 むしろ、見せろってことなのだろうか……七月二十日。先生は僕に会うなり……

先生 おい！ きゅうり！
僕 と呼んだ。今日は野菜にハマっていたらしい！ だから……

先生 お前は、俺が今まで見てきた中で、さいつこーのさやインゲンだ！

僕 ……あれは、褒め言葉だったのだろうか。だとしたら、嬉しい。

先生、去っていく。

僕 七月二十一日。僕が訓練を受け始めて、今日でちょうど一週間になる。

長かったようでも、短かったようでもある。一週間経っても、先生のこととはちつともわからない。今日も、僕が挨拶をすると……

先生、奇妙な腰つきで歩いてくる。

先生 はい、おはよう……オチヨ!

僕 オチヨとはなんだろうか?

先生 お前とはじめて会ってから、今日で八日目だな。(僕を指差し)……オチヨ!

僕 ……オチヨとはなんだろうか!

先生、奇妙な腰つきで去っていく。

僕 七月二十二日。騒がしさで目をさますと、先生が燃えていた。これは比喩ではなく、本当に燃えていた。

先生、身体中の火を消そうと必死にもがきながら出てくる。

僕 僕はひどく動揺していた。

先生 私を飛び越していけ!

僕 震えがきた。

先生 この火を、飛び越していけ!

僕 ……僕は、その火を飛び越した。七月二十三日。先生は、火傷ひとつすることなく、ピンピンしていた。だが、火に対する興味関心は、今日も残っていた。

先生 お前は、燃えるか?

僕 僕は戸惑っている……

先生 お前は、燃えるゴミか? 燃えないゴミか?

僕 僕が応えると……

先生 なんだ。じゃあ、ただのゴミか。

先生、そそくさと去っていく。

僕 去っていく先生の背中を見て、激しい後悔に襲われた。このままでは、先生にとって僕は、ただのゴミになってしまう……七月二十四日。朝一番で、先生に想いの丈を伝えた。

先生、暗闇にいるみたいに、手で周りを確認しながら出てくる。

先生 ……ん? どこ?

僕 僕が居場所をいうと……

先生 (急に) バカヤロー!

先生、僕を手探りで探し、抱き寄せる。

先生 自分で自分を、ゴミなんて呼ぶんじゃない！ お前は、人間だ！

ゴミに似ていなくもないが、人間だ！ 限りなくゴミっぽいが、人間だ！ もはや、ゴミ同然の人間だ！ というかもう、ゴミだ！ この

ゴミが！ ゴミ！

僕 なぜだか、僕の目からは涙が溢れていた。見えなかったけど、先生も泣いているようだった。ずっと、こうしていたと思った。

先生 あ！ ゴミ出すの忘れてた！

二人、離れる。

僕 七月二十五日。朝起きると、目の前に先生が立っていた。

先生 あのさ、手伝って欲しいんだけど。どう？ いい？ いいに決まってる？

僕 手伝うことに決められていた。

先生 ここ一週間くらい、出すの忘れててさ。ただ、重くて持てないのよ。

二人、一度消える。

すぐに死体を引きずって戻って来る。

先生の手には特大のゴミ袋がある。

死体をゴミ袋に詰めようとしている。

僕 その死体は、ひどく腐敗臭がした。昨日の先生の言葉が、頭に残って

いる。僕もいつかは、ああやってゴミのように、いや、ゴミとして捨てられてしまうのだろうか。

先生、ゴミ袋の死体を、足で蹴りながら転がし、消える。

僕 七月二十六日。今朝は、男の叫び声で目を覚ました。先生が、知らない男を暴行していた。正確に言うと、その男は一度だけ見たことがある。僕と先生がはじめて会った日に、先生と一緒にいた男だ。彼は一

体誰なのか。その時はかなり親密に見えたのだが、今日はまるでゴミのようだった。七月二十七日。今朝も、男の叫び声で目が覚めた。昨日とは違う男だった。でも、僕も知っている男だった。大関の富士の千代だった。

先生、富士の千代を足で蹴りながら転がし、登場。

富士の千代（転がりながら）やだ！ 絶対やだ！ 別れたくない！ なん

で？ やだやだやだやだ！

先生 おいデブコラ！ もういいんだよお前使えねえんだよ！ いまま

でありがとなあ！

富士の千代 やだやだ！ せっかく頑張って優勝したのに！ 来場所か

らは横綱になれるのに！

先生 お前が何頑張ったってんだよ！ 俺がしてあげたんだろ何てめえ

の力で勝ち取ったみたいと言ってるんだよ！ 殺すぞボケ！

富士の千代 ごめんなさい！ ごめんなさい！

富士の千代、這いながら逃げる。

僕 七月二十八日。今日の先生は、青春ドラマにでもはまっていたのかも
しれない。

先生 ……覚えてる？ はじめて出会った日のこと。

僕 忘れるはずはなかった。

先生 私は、覚えてないなあ……。私さ……。引越しするんだ。とつても
遠いところ。もう、会えなくなるんだ。

僕 突然のことに、僕は何も言えないでいた。すると先生は……。

先生 だからさあ……。お金かかるんだよね。

僕 と、僕の目を見つめてきた。

先生 下ろしてきてくんない？ お金。

僕 そう言っつて先生が手渡したのは、通帳ではなく、銃だった。

先生、僕に銃を手渡す。

先生は去っていく。

僕 やるべきことはすぐにわかった。七月二十九日。銀行を襲った。僕に
とつてはじめての犯罪だった。拍子抜けするくらいに、簡単に成功し
た。先生の言う通りにしただけで、すべてがうまくいった。何かを成
し遂げたことなんて、これまでの人生一度もなかった。なんて気持ち
いいのだろう。人生ではじめて、自分が誇らしく感じられた。こんな
気持ちははじめてだ。僕は、先生と出会ったことに心から感謝してい

る。あるとき、怖がらずに先生に付いて行ってよかった。

先生は、いつのまにかカバンを持って立っている。

僕、先生に銃を返す。

先生 いいね、君。センスいいね。向いてるよ、ガス人間。

僕 ……やつと僕は、先生の望んだ存在になれたのかもしれない。やつと、
先生の役に立てたのかもしれない。

先生 お前は、俺が今まで見てきた中で、さいっこのガス人間だ！

僕 先生がこんなにも僕を褒めてくれている。こんなに嬉しいことはない。

先生、横になって眠っている。

僕、日記に書き込んでいる。

僕 七月三〇日。先生は、僕の隣でまだ寝ている。昨夜、先生は急に僕の
ベッドに入ってきて……。はじめてだったが、幸せだった。この気持
ちを、どう表現したらいいのか。もう僕は、いつ死んだっていい。

僕、ボタンと日記帳を閉じ、部屋を出て行く。

先生、起き上がり、日記を読む。

間

すぐに僕が戻ってくる。

僕 あ、先生。

先生が日記を読んでいることに気づき、それを取り上げようかどうか挙動不審になる。

先生 今日でもいい？

僕 え？

先生 死んでもいいんだって？

僕 ……はい？

先生 お前、今日から水島くんね。死んでも。わかった？

僕 ……はい。

間

照明C・O
了